

横浜開港資料館

昭和57年12月の曇天の肌寒い午後、横浜開港資料館を訪れた。

資料館の中庭には玉楠の木がある。ここで安政元年3月3日(1854・3・31)日米和親条約が締結



された。もっとも関東大震災で幹は焼失、残った根からたくましく再生したのが現在のそれである。のち英国領事館が置かれ、近代日本の海外との接点として長く命運を共にして来た。

昭和47年東京の英国大使館が横浜の領事業務を吸収するに及び、英国領事館の建物と土地は横浜市の手に移った。やがて同市は54年4月買収を完了し、日本開国と横浜開港に関する歴史資料の収集保存、調査研究、公開展示を目的とする文化施設の設置を決めた。

56年3月、旧領事館の内部改修とこれに隣接する新館が完成。同年6月2日の開港記念日(開港は安政6年6月2日)に開設、横浜市立大学の遠山茂樹教授が館長に就任した。新・旧共に鉄筋コンクリート造りで、地上3階地下1階の建物である。もっとも旧館は事務室、研究室として使用されている。

収蔵資料は現在約11万点あり、幕末開港期から明治・大正期に至る図書・文書・記録・マイクロフィルム類、絵図・写真類、器物など横浜関係資料を広く所蔵する。特に横浜絵の収集はつとに有名。

展示室は3つあり、うち2室が『開港への道—世界史のなかの日本』と『街は語る—開化ヨコハマ』をテーマとする常設展示

室である。前者はペリー来航と横浜開港、後者は明治文明開化期にスポットを当てる。残る一つは特別・企画展示室で、特別展は外部資料、企画展は所蔵資料を中心に年4回、3か月間開催する。初年度は特別展示が『ペリー提督展』と『自由民権期の横浜展』、企画展示が『下岡蓮杖と横浜写真展』と『遠藤於菟と横浜の近代建築展』、57年度特別展示が『ジョルジュ・ピゴー展』と『アメリカ総領事ハリス展』、企画展が『ブルーム・コレクション展』で、特別展、企画展を交互に開催する。

閲覧室は新館地下1階にあり、関係資料7.2万点。うち横浜毎日新聞、横浜貿易新報などの複製本が開架利用可能。またイラストレイテッド・ロンドン・ニュース(週刊1842~1894)、パリのイリュストラシオン(週刊1843~1944)のほぼ全号を所蔵する。絵入りの日本関係記事も散見され、極めて興味深い。平日の閲覧時間は9時30分から19時30分、土・日曜日と祝日が16時30分までと、利用者の便を図る。他に収容人員百名の講堂を使って、横浜についての各種歴史講座、講演会を開催している。横浜は関東大震災と今時大戦の横浜空襲で、多数の歴史資料を焼失、これが契機となって残存資料の積極的収集保存が始まった。市内旧家の所在資料調査と併せて、資料館が今後一層充実するものと思われる。

折からハリス展開催中で、総領事、公使時代のハリスを中心に日米関係をとらえようとする企画。展示資料は主として、生前関係したニューヨーク市立大学の提供による。同館研究員内海孝氏の明快な説明と効果的展示により、当時の風雲急な幕末期の空気に浸ることが出来た。

(アジア・アフリカ課 中林隆明)